【原著】

新たな入学者追跡調査における選抜方法評価

林寛子（山口大学）

山口大学では AO 入試による入学者の学力不足が常に指摘されている。しかし，これまでの入学者追跡調査においては、AO 入試による入学者の学力が劣るとは言い難い結果が得られている。AO 入試導入初期の頃、AO 入学者の退学や留年が多かったことから大学教育についていけない学力不足の学生という負のイメージが貼り付けられたのである。大学は多様な入学者をいかに育成していくかが問われている。入試における入学者の学力担保だけでなく，大学における学びに対する意欲や意識も重要である。そこで，山口大学では大学における授業科目の成績評価と入学時，卒業時の意識調査を関連づける入学者追跡調査を導入し，意識と成績の関連を分析することにした。本稿は，入学者追跡調査が選抜方法の改善にフィードバックできる方法を検討する一つの試みを紹介するものである。

1 はじめに

山口大学は平成 18 年度から，大学教育システムの中で入学者がどのように成長したのか，大学の教育機能の観点から入学者追跡調査を試み，入学者選抜の在り方を模索している。この入学者追跡調査の試みは，大学における授業科目の成績評価だけでなく，社会が求める資質・能力の保有経過を調査する手法である。具体的には，社会が求める資質・能力がどの程度身についているのか学生自身が自己評価するアンケート調査を入学時と卒業時に実施している。

この入学時と卒業時の社会が求める資質・能力の保有経過の分析から，入学時の資質・能力の自己評価では，AO 入試による入学者は「積極性」や「リーダーシップ」といった資質・能力を高く評価,「持続力」や「集中力」といった資質・能力を低く評価しており，他の入学区分による入学者の自己評価の傾向と異なっていた。しかし，卒業時では AO 入試による入学者の自己評価は，全ての資質・能力の項目で他の入学区分の入学者の自己評価と比べて高く自己評価されていた。AO 入試による入学者は数多くの資質・能力を保有する優れた人材として社会に輩出されていると言える（林・富永 2009)。

山口大学において、AO 入試による入学者は，入試がもつ選抜の性格上，学力を問われず入学してきたというイメージから，他の入学区分の入学者と比較して学力面で劣っているといったマイナス評価が強い。これは、AO 入試導入初期の頃、AO 入学者の退学や留年が多かったことから生じた評価も加わっており、印象にすぎないと考える。

山口大学の全入学者の入試における成績評価は選抜方法ごとに違うために一律に入試データとして分析することはできない。そこで，前期日程における入学者の入試時の成績と入学後の大学教育における成績とを見ると，大学教育における成績は入試時の成績と同様ではない。

AO 入試による入学者は，入試時の高校教育の内容で測られる学力は劣っているかもしれない。しかし，大学教育における成績が入試時と同様でないことを考えると，AO 入学者に入試時点において負の印象評価を貼り付けることは，AO 入試の選抜方法にも、大学教育にも悪循環をもたらすと考える。

入学時の成績が良いにこしたことはない。だが，大学で学ぼうとする意欲や意識はさら

に重要な要因になってきている。そこで，大学で学ぼうとする意欲や意識について検証する入学者追跡調査の試みを検討した。この試みを行うためには，大学における授業科目の成績と入学時，卒業時調査の学生の意識とを関連づけて追跡する必要がある。平成 18 年度から入学者追跡調査の一環として実施してきた入学時，卒業時のアンケート調査は，個人を特定しないアンケート調査であったため，平成 21 年度の入学時調査，卒業時調査から学籍番号の記入を求めるよう改善を行った。この改善により，入試データ，在学成績データに加えて，入学時と卒業時の資質・能力自己評価などの意識の追跡が可能になった。

この入学者追跡調査の試みは，入学者の意欲や意識と大学への適応，大学での成績との関連を明らかにし，その結果は，入学者選抜の方法，特に特別選抜における選抜方法を改善するための資料となると考えている。入学者追跡調査は入学者選抜の改善にフィードバックできるものでなければならないと考えおり，フィードバック可能な追跡調査を検討する一つの試みである。

2 山口大学の入学者と分析の対象者

現時点では，平成 21 年度入学者の入試データ，入学時調査データ，1 年時の前期成績データを蓄積している。

山口大学の平成21年度入学者は1981名である。入学区分の内訳は，前期日程 66.5%（1318 名），後期日程 15.0%（297 名），センター試験を課さない推薦入試Ⅰ6.9%（137 名），センター試験を課す推薦入試Ⅱ4.8%（95 名），センター試験を課さない AO 入試 6.4%（127 名），その他の入試は 0.4%（7 名）である。本報告では，前期日程，後期日程，推薦入試Ⅰ，推薦入試Ⅱ，AO 入試の 5 つの入学区分で分析する。

入学時調査の対象者は平成 21 年度入学者全員である。調査は，学部オリエンテーションや学科・コースごとに全員がそろう授業などで同一日に配付・回答・回収する形式で実施している。入学時調査の調査項目は，資質・能力の自己評価のほかに，進学動機について，受験校決定について，大学説明会などの参加状況について設けている。

入学時調査の回収率は平成 18 年度から 20 年度までは 96%以上あったが，21 年度は 94.2%と若干下がった。21 年度から学籍番号を記入する調査に改め入学者に調査協力と理解を求めたが，入学時調査そのものは全て回答しているものの学籍番号は記入していない調査票もあった。

本報告では，入学時調査，1 年時の前期試験データを一致することができた 1821 名を分析対象とする。分析対象者の入学区分別割合は表 1 のとおりである。

表 1　分析対象者の入学区分

	全体
前期日程	66.2
後期日程	14.9
推薦入試Ⅰ	7.2
推薦入試Ⅱ	4.6
AO 入試	6.7
その他	0.4
合計	100.0

3 特別選抜による入学者の優秀さと意識

3.1 平成 21 年度入学者の資質・能力の自己評価

入学時調査では，平成 18 年度より資質・能力を表す 25 項目について自己評価を求めている。平成 21 年度の自己評価は 4 段階評価「かなりあてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」で回答を求めた。入学者全体の「かなりあてはまる」「少しあてはまる」を合算した値を示したものが図 1 である。入学者全体では，「協調性」「社会性」「探究心」が上位項目で 8 割以上の入学者が保有していると自己評価している。

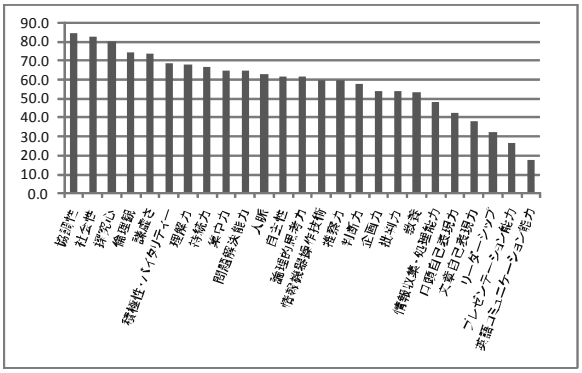

図 1　入学者の資質・能力自己評価

この資質・能力の自己評価 25 項目について，「かなりあてはまる」4 点，「少しあてはまる」3 点，「あまりあてはまらない」2 点，「全くあてはまらない」1 点を得点として，25 項目の合計点を算出し，資質・能力の自己評価得点とした。そして，入学区分別に資質・能力の自己評価得点の平均点を算出した（表 2）。AO 入試による入学者の自己評価得点が 70.3 点で最も高く，次いで推薦入試Ⅱとなった。これに対して，前期日程による入学者の自己評価得点が 65 点と最も低い。

表 2 入学時調査による入学区分別
資質・能力の自己評価得点平均点

	資質・能力の自己評価得点の平均値
前期日程	65.0
後期日程	67.0
推薦入試Ⅰ	66.8
推薦入試Ⅱ	67.4
AO 入試	70.3
全体	66.0

（F 値　11.31　有意確率 0.000 ）

この結果は，林・富永（2009）が平成 18 年度の山口大学卒業時調査の資質・能力自己評価の分析で AO 入試による入学者の資質・能力の自己評価が他の入学区分に比べて高い結果が得られたことと同様である。平成 18 年度分析時点では，山口大学 AO 入試が自己アピールを求めていることを考えると，AO 入試による入学者は自己顕示欲が強く，自己評価を高く表現する傾向にあると考えられると推察したが，実際に AO 入試による入学者は自己顕示欲が強いだけなのだろうか。

3.2 平成 21 年度入学者の 1 年時前期定期試験成績

そこで，平成 21 年度入学者の 1 年時の前期試験の成績を分析した。GPA は山口大学が設定している式[1]に基づいて算出し，入学区分別に GPA の平均点を算出した（表 3）。推薦入試Ⅰ，推薦入試Ⅱによる入学者の GPA がともに 2.8 と高く，次いで AO 入試による入学者が 2.73 と一般入試の前期日程，後期日程による入学者よりも高くなっている。AO 入試による入学者は自己評価が高いだけではなく，学業面においても良い成績を収めている。

表 3 入学区分別 GPA
（1 年前期時点）

	GPA 平均値
前期日程	2.57
後期日程	2.64
推薦入試Ⅰ	2.84
推薦入試Ⅱ	2.85
AO 入試	2.73
全体	2.62

（F 値 7.674　有意確率 0.000 ）

しかし，大学内外において特別選抜における入学者の学力が低いという評価が浸透しており，議論の焦点は常に特別選抜における学力担保である。確かに，山口大学においては特別選抜の学力担保が問題となるデータがある。それは，TOEIC 成績のデータである。山口大学では TOEIC を活用した英語教育を導入しており，学部ごとに卒業要件として取得すべきスコアを掲げている。1 年の前期定期試験までにその卒業要件となるスコアに到達して単位認定された者の割合を入学区分別に算出した（表 4）。センター試験を課さない入試である推薦入試Ⅰ，AO 入試における入学者の認定状況が低い。特に AO 入試による入学者の認定状況の低さが目立つ。このデータからは，センター試験を課さない特別選抜による入学者の入学時の英語の学力は低いと言える。

表4 入学区分別TOEIC卒業要件認定状況
（1年前期終了時点）

	認定済み	認定なし
前期日程	88.0	12.0
後期日程	93.7	6.3
推薦入試Ⅰ	71.2	28.8
推薦入試Ⅱ	94.0	6.0
AO入試	65.0	35.0
全体	86.4	13.6

（χ^2=92.789，df=5，p=0.000）

センター試験を課さない特別選抜による入学者の入学時の高校教育内容で測られる学力は劣っているかもしれない。しかし，TOEICの卒業要件は4年間のうちに認定されれば良い。TOEIC認定の状況を追跡すると，推薦入試Ⅰ，AO入試による入学者も学年が上がるにつれてほとんどの者が認定されている。

入学時に入学区分による資質・能力や学力に差異が生じていることは，それぞれの入試の特質上当然のことであり，特別選抜により多様な学生が獲得されていることを意味するであろう。入学後，学生がいかに大学教育で育成されるかが問われるのである。

3.3 大学進学に対する意識と在学成績

それでは，TOEIC認定状況は低くても，1年時の前期にGPAが高くなっている特別選抜による入学者の意欲や意識はどのようなものなのだろうか。

入学時調査では入学者の大学進学の理由について15項目からあてはまるもの全て回答を求めている。入学者全体（図2）では，「専門的な知識を身につけるため」(62.4%)，「幅広い教養を身につけるため」(54.6%）を理由としてあげる入学者が多い。

入学区分別に比較するために15項目について「理由である」を1点，「理由でない」を0点とする変数を作成し，15項目それぞれについて入学区分別に平均点を算出した。そのうち入学区分に差異が生じているのは6項目である。その6項目の平均値は表5のとおりである。

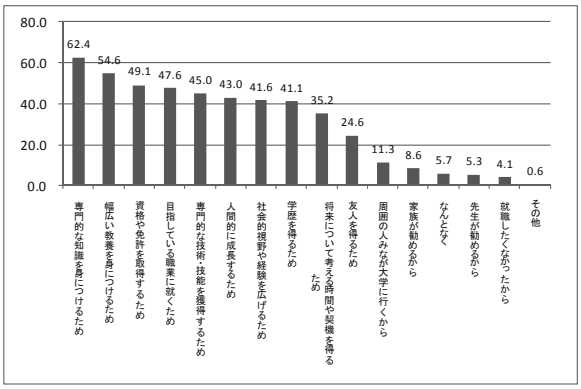

図2　入学時調査における入学者の大学進学理由

表5 入学時調査における入学区分別大学進学理由

		平均値	F 値	有意確率
専門的な知識を身につけるため	前期日程	.598	3.107	.008
	後期日程	.701		
	推薦入試Ⅰ	.614		
	推薦入試Ⅱ	.711		
	AO入試	.659		
	その他	.857		
	合計	.624		
目指している職業に就くため	前期日程	.464	2.344	.039
	後期日程	.491		
	推薦入試Ⅰ	.439		
	推薦入試Ⅱ	.627		
	AO入試	.545		
	その他	.571		
	合計	.479		
社会的視野や経験を広げるため	前期日程	.396	3.197	.007
	後期日程	.421		
	推薦入試Ⅰ	.455		
	推薦入試Ⅱ	.542		
	AO入試	.480		
	その他	.857		
	合計	.418		
先生が勧めるから	前期日程	.048	5.526	.000
	後期日程	.041		
	推薦入試Ⅰ	.152		
	推薦入試Ⅱ	.048		
	AO入試	.041		
	その他	.000		
	合計	.054		
周囲の人みなが大学に行くから	前期日程	.133	3.608	.003
	後期日程	.107		
	推薦入試Ⅰ	.076		
	推薦入試Ⅱ	.048		
	AO入試	.033		
	その他	.143		
	合計	.114		
なんとなく	前期日程	.071	3.407	.005
	後期日程	.033		
	推薦入試Ⅰ	.045		
	推薦入試Ⅱ	.012		
	AO入試	.008		
	その他	.000		
	合計	.057		

AO入試，推薦入試Ⅱは目指している職業に就くことや社会的視野や経験を広げたいなど大学進学に対する目的意識が明確である。これに対して，推薦入試Ⅰは先生の勧めで進学を決めたり，前期日程，後期日程では周囲が大学に行くからといった理由で進学を決めたり，大学進学に対する目的意識が不明確な

者がいることがわかる。

こうした大学進学に対する目的意識とGPA，資質・能力の自己評価がどのような関連にあるのかをみるために相関分析を行った（表 6）。表 6 を見る前に，GPA と入試における成績との相関を確認しておきたい。前期日程の入学者のみで学部別に GPA と入試における成績との相関を分析すると，センター試験結果との相関は，医学部で 0.530（p＝0.029）であるが，7 学部中，人文，教育，工学部は有意な相関がない。また，GPA と個別試験の成績の相関は人文学部で 0.322（p＝0.001）であるが，他学部は有意な相関はない。全学部での GPA とセンター試験成績との相関は 0.230（p＝0.000），個別試験成績との相関は 0.198（p＝0.000）である。前期日程による入学者全体では，入試成績が良かった入学者の GPA が高くなる傾向にある。

そこで大学進学に対する目的意識と GPA，資質・能力の自己評価の相関（表 6）を見てみると，相関係数の値は高くはないが有意な相関が表れている。入学者全体では，資格や免許の取得（0.137）や社会的視野や経験を広げるため（0.105）を理由として進学した者は GPA が高く，なんとなく大学進学した者は GPA が低い。そして，専門的な知識や技術・技能を身につけるためや，資格や免許を取得し，大学卒業後に目指している職業に就くために大学に進学した者は資質・能力の自己評価が高い。これに対してなんとなく大学に進学した者（－0.156），就職したくなかったから進学した者（－0.107）は資質・能力自己評価が低い。

入学区分別の GPA，資質・能力の自己評価と大学進学に対する目的意識では，前期日程は全体の傾向とほぼ同様であるが，後期日程では自己の成長を理由に進学している者が GPA は高く，専門的な知識や教養を身につけるためなど，自己の成長を求めて大学に進学した者が自己評価は高い。推薦入試 I では就職したくなかったという理由で進学した者が GPA は低く，資格の取得や就職のために大学に進学した者が自己評価は高い。AO 入試では目指している職に就きたいために大学に進学した者が GPA は高く，自己評価が高い者が GPA は高いといった入学区分による差異が生じている。

しかし，全ての入学区分で共通していることは，他者から大学進学を勧められた，周囲の人みなが大学に行くから，就職したくなかったから，なんとなくなど，大学への進学理由が積極的ではない入学者の GPA が低いことである。

表 6　大学進学に対する目的意識，GPA，資質・能力の自己評価の相関分析

	全体		前期日程		後期日程		推薦入試 I		推薦入試 II		AO 入試	
	GPA	自己評価	GPA	自己評価	GPA	自己評価	GPA	自己評価	GPA	自己評価	GPA	自己評価
GPA	1	.078**	1	.064*	1	.028	1	-.018	1	.185	1	.183*
自己評価	.078**	1	.064*	1	.028	1	-.018	1	.185	1	.183*	1
幅広い教養を身につけるため	.077**	.076**	.087**	.064*	.080	.137*	.072	.063	.019	-.098	.016	.134
専門的な知識を身につけるため	.098**	.150**	.118**	.138**	.097	.134*	.030	.198*	.025	.146	-.075	.071
専門的な技術・技能を獲得するため	-.009	.130**	.014	.128**	.013	.115	-.109	.183*	-.070	.104	-.185*	.111
資格や免許を取得するため	.137**	.114**	.148**	.083**	.055	.084	.133	.347**	.185	.113	.154	.155
目指している職業に就くため	.067**	.182**	.075**	.176**	-.025	.176**	.002	.297**	.014	.112	.214*	.064
学歴を得るため	-.074**	-.040	-.077**	-.057	.037	.017	-.138	.090	-.018	-.051	-.159	-.148
将来について考える時間や契機を得るため	-.010	-.062**	-.032	-.081**	.103	-.001	.011	.003	-.022	-.084	-.065	-.124
友人を得るため	-.015	.064**	-.001	.054	-.019	.087	-.023	.156	.032	.006	-.061	.015
人間的に成長するため	.022	.065**	.011	.043	.163**	.125*	-.128	.177*	.060	.127	-.032	-.063
社会的視野や経験を広げるため	.105**	.047*	.070*	.010	.168**	.106	.143	.086	.198	.032	.095	.008
家族が勧めるから	-.033	-.069**	-.033	-.070*	-.031	-.017	-.104	-.149	.094	-.075	.005	-.072
先生が勧めるから	-.024	-.078**	-.039	-.073*	.054	-.133*	-.094	-.032	-.099	-.067	-.060	-.182*
周囲の人みなが大学に行くから	-.027	-.086**	-.009	-.084**	-.083	-.036	.032	-.082	.153	-.061	-.030	-.034
就職したくなかったから	-.065**	-.107**	-.036	-.109**	-.119	-.048	-.218*	-.170	-.040	.082	-.101	-.058
なんとなく	-.118**	-.156**	-.101**	-.143**	-.165**	-.108	-.156	-.293**	-.126	-.055	-.064	-.111

*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。
**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

1年の前期終了時点では，資質・能力の自己評価とGPAの入学者全体の相関係数は0.078と低い。GPAと大学進学に対する目的意識との入学者全体の相関係数も高くはないため，仮説のとおりと現段階では言い難い。しかし，1年の後期，2年と学年が上がっていく中で入学者一人一人のGPAはさまざまに推移していく。その推移には進学目的意識や資質・能力の自己評価が影響してくるものと考えており，今後もデータ蓄積と分析を継続していく。

4 まとめ

山口大学は平成22年度入試からアドミッション・ポリシーの一部変更した。これは2008年12 月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」における提言内容を踏まえ，文部科学省が学士課程教育の質の維持・向上のためには高校教育と大学教育の円滑な接続は欠かせないという観点から，入学者選抜の在り方について方向性を示したことによる。その方向性の１つがアドミッション・ポリシーの明確化であった。これを受け，山口大学ではアドミッション・ポリシーに大学入学までに身につけておくべき教科・科目を加え，その内容について具体的に示した。この変更においては，高校教育の内容や水準に配慮している。だが，高校教育における教科・科目に関連する入試成績と在学成績との間に，必ずしも相関が高いわけではない。

山口大学アドミッション・ポリシーでは，大学全体で求める人材像，さらに学部の求める人材像において高校教育では測りにくい意欲や，資質・能力を求めている。大学教育において意欲など学生の意識が重要であることは，既にアドミッション・ポリシーで求めてきたように認識されているのである。しかし，抽象的であり，入学者の意識を評価したり，測定したりすることは容易ではない。高校教育と大学教育の接続のためには，高校教育の内容だけでなく意欲や資質・能力の部分も検証し，具体的に示していく必要があるだろう。

大学が多様な入試を行えば，多様な資質・能力を持った学生が入学する。学力試験を免除された特別選抜による入学者の学力不足が問題視されるが，大学は新しい入試による入学者を大学教育においていかに育成していくのかが求められ，それがまさに大学の教育力である。だからこそ，大学における教育効果を測り，入学者選抜の在り方にフィードバックしていかなければならない。そのための入学者追跡調査の一つの試みが本稿に示した追跡調査の手法であり，今後のデータの蓄積とともに分析を行っていく。

注

(1)山口大学では，秀 4 点，優 3 点，良 2 点，可 1 点，不可 0 点，理由放棄 0 点 Grade Points を算出している。GPA の算出方法は，
GPA＝Σ(Units×Grade Points)／Σ(Units)
である。GPA の最高値は 4.0 である。
※Units＝単位数

参考文献

大学入試センター（1993）.「大学の各専門分野の進学適性に関する調査研究報告書―大学入学者選抜資料としての適性検査のための基礎研究―」

林寛子（2007）.「AO 入試による入学者の TOEIC 成績」『山口大学 AO 入試 2002～2006 5 カ年総括報告書』.51-56

中央教育審議会（2008）．「学士課程教育の構築に向けて（答申）」

富永倫彦・林寛子（2008）.「AO 入試 1 期生の卒業時における資質・能力―学生の自己評価と指導教員による評価―」『大学入試研究ジャーナル』No.18.107-112

林寛子・富永倫彦（2009）.「入学者追跡調査の新たな試み」『大学入試研究ジャーナル』No.19.175-180

山口大学アドミッションセンター（2006・2007・2008・2009）.「大学進学時の状況に関する調査報告書」18 年度版・19 年度版・20 年度版・21 年度版